

メッセージ「神様の力が働く場所」

牛田匡牧師

聖書 列王記 下 5章1-14節

先月出された「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」は、当初は今日までということでしたが、やはり来月までの延長となりました。今年の春に比べると、日本国内だけでも感染者数は桁違いに多く、全然減っていませんが、数百人であれば少なくなったと感じてしまうように、私たちの感覚が、数字に慣れてしまったようにも感じています。世界を見ると、ワクチンの接種が少しずつ始まっているとはいえ、感染収束はまだまだ先が見えませんが、様々な変異種が各地で見つかっていますので、これから先もどのようになるのか、緊張と不安が続いています。そのような中、日本では昨年から急に「アマビエ」という妖怪が注目を集め出し、今では「疫病退散」の願がかけられた「アマビエのお守り」などが、全国各地で作られているそうです。人間の力が及ばない疫病というものに対して、人々は古くから世界各地で神に対して祈って来たのでしょう。

今回の聖書の箇所は、そんな病と癒しのお話でした。時代は古く紀元前9世紀頃、外国であるアラムから、ナアマンという将軍が「規定の病」の癒しを求めて、預言者エリシャを訪ね、清くされたというお話です。聖書協会共同訳では「規定の病」という新しい訳語が当てられています。このヘブライ語「ツァーラアト」は、人間だけではなく、衣服にも家にも生じる「かび」のようなものであり、祭儀的に汚れたものと見なされる皮膚疾患の総称だと考えられています（レビ記13-14章）。清いか汚れているかの判断を下すのは、祭司の役目とされていましたが、皮膚に現れた症状によって、汚れていると宣言されたり、後に清くなったり、更には清いと宣言されてから再び汚れていると宣言される状態になったりすることもあったようです。そのため「ツァーラアト」は、いわゆる「ハンセン病」ではないと考えられています。

かつて「らい病」と訳されたことで、誤解と差別を助長してしまったという反省から、新共同訳では「重い皮膚病」と訳されていました。しかし、その訳も「アトピー性皮膚炎」などの疾患を持つ人々に対する配慮に欠けるものでした。そのために新しく「規定の病」という訳語が選ばれたのではないかと思います。古代イスラエルの共同体では、この「ツァーラア

ト」に罹^{かか}った人は、病気の感染防止のためというよりも、祭儀的な汚れをうつさないために、清いと宣言されるまで、人々から隔離されるようにと、ヘブライ語聖書の律法には定められていました。

アラムの王の将軍ナアマンは、そのようなツァーラアトに罹^{かか}っていましたが、「イスラエルの預言者のところに行けば、その病を癒してもらえる」という妻の侍女の言葉を聞き、アラムの王の許可を得てからはるばるエリシャを訪ねました。ナアマンが手土産として用意した「銀 10 キカル」は約 340kg、「金 6000 シェケル」は約 68kg なので、ものすごい量のお金です。実際にそれだけの大金を持って行ったのか、昔話として誇張されているのかは分かりませんが、それらを馬と戦車に積んでナアマンはイスラエルの王を訪ねました。しかし、イスラエルの王は、アラムの王が「ツァーラアトを癒してください」という無理難題を押し付けて、戦争を始める言いがかりをつけようとしていると思い、衣を引き裂いて怒りました。一方、預言者エリシャはその知らせを聞き、ナアマンを自分のところに寄こすようにと、人を送りました。そこでナアマンは期待に胸を膨らませて、エリシャの家の戸口にまでやって来ましたが、主人であるエリシャは表に出ることなく、使いの者に「ヨルダン川で七度身を洗いなさい」と伝言させました。なぜエリシャは自らナアマンに会わなかったのかは分かりません。はるばるアラムからやって来たのにもかからず、主人は顔を出さず、使いの者に伝言させるなんて、失礼な話です。

そのためにナアマンは「私は、彼が自ら出て来て私の前に現れ、彼の神、主の名を呼んで、患部に手をかざし、病を癒すものとばかり思っていたのだ」と言って、怒って立ち去ってしまいました。しかし、一緒に旅をして来たであろう家臣たちの進言によって彼は思い直し、言われた通りにヨルダン川に下って行って、七度身を浸しました。すると彼の身体のツァーラアトは清くなりました。その後、彼はエリシャの許^{もと}に戻り、今度は直接エリシャと対面してアラムから持って来た贈り物を渡そうとしますが、エリシャはそれを固く断って受け取らなかったという話に続いていきます。さて、このナアマンの病の癒しの物語は、今日の私たちに何を伝えているのでしょうか。イスラエルの神は、この時代から外国人にも癒しの奇跡を与えていたということでしょうか。私はこの物語は、「神様の力はどこに働くのか」ということを示しているのではないかと思います。

ツァーラアトに罹^{かか}った人は、共同体から隔離されて生活していましたが、清くなると、そこから再び共同体に戻ることを許されました。皮膚疾患が治まった後、共同体に戻るための清めの儀式についても、「レビ記」には細かく定められています。そのことから、このツァーラアトという病が、不治の病ではなく、治ることもあった病であるということが分かりますが、当時もちろん特効薬があるわけでもなく、人々は事実上、自然治癒を待つしかありませんでした。そのような中、ナアマンが考えていたように「主の名を呼んで、患部に手をかざし、病を癒す」ような癒しの奇跡に対する人々の期待というものも、当然あったのだらうと思います。しかし、実際にはそのような癒しはほとんど起こりませんでした。

新約聖書「ルカによる福音書」4章27節には、イエス様が「預言者エリシャの時には、イスラエルには規定の病（レプラ<ツァーラアト）を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンだけが清められた」とナザレの会堂で人々に語ったと記されています。ですから、紀元1世紀の人々にまで、このナアマンの話は語り継がれていたということが分かります。しかし、なぜナアマンだけが清められたのでしょうか。大量の金銀を持っていたからでしょうか。もちろん、そうではないでしょう。それはナアマンが、一旦は腹を立てて立ち去ったとはいえ、家臣からの進言を受け入れ、思い直して、実際に言われた通りにヨルダン川に下って行って身を浸してみた、というその実践の故だったのではないかと考えられます。

ナアマンがいたアラムにはヘルモン山という標高3000m近い山脈があり、そこからの雪融け水が湧き水となって川になり、それがやがてガリラヤ湖に注ぎ、ヨルダン川へとつながって行きます。南北に流れるヨルダン川の末端である死海は海拔下395mで有名ですが、ガリラヤ湖も海拔下209mです。ヨルダン川全体では、最北の水源地から死海までの高低差は915mもあり、ヨルダン川はその高低差を蛇行しながら死海まで約600kmも流れています。東アジアに住む私たちにしてみると、中国の黄河やインドのガンジス川のイメージの方が身近かもしれませんが、ヨルダン川も岸辺からの砂や土が多く流れる濁った川なのだそうです。そのため、アラムから旅をして来たナアマンたちにとっては、ヨルダン川というのは、アラムに比べると標高も随分低く、水も濁っていて決して清らかとは言えないような川だったのでしょう。「ダマスコの川であるアバナやパルパルのほうが、イスラエルのどんな水よりも良いではないか」とナアマンが怒って言った通りで

す。しかし、その低み、人の目から見たら濁っていて、決して清らかには見えない水の中でこそ、エリシャが預言した通り、神様の力が働いて、彼のツァーラアトは清められました。それから約 800 年後の紀元 1 世紀に、バプテスマのヨハネが現われて、人々にバプテスマを授けたのも、その同じ、低みを流れるヨルダン川の濁った水の中でした。

水に体を沈めて、体を浸すとは、自分の身体、命を死なせるということの象徴でもあります。自分の考え、価値観に死んで、新しく生き直す。神様の価値観、視座から世界を見つめ直すということでバプテスマが行われます。ナアマンは「こんな汚い、濁った水の中で、ツァーラアトが清められるわけがない」と思いつつ、それでもとにかくやってみた。自分の考えを一旦脇に置いて、水に身を沈めてみた。そこに神様の力が働きました。その時代に、「ナアマンの他に、清められた人はいなかった」と言われているのは、彼の他には、実際にやってみる人はいなかった。エリシャの許まで来ても、期待外れの対応に怒って、「預言者と言っても、結局は癒せないじゃないか」と決めつけ、諦めて、帰ってしまう人が多かったのではないのでしょうか。

私たちが期待する通りの病気の癒しが起こるか起こらないかは、信仰心の多いか少ないか、篤^{あつ}いか薄^{うす}いかに関係ありません。もしも熱心な信仰心によって病気が治るのであれば、現在、コロナはこんなにも世界中に拡がっていません。病気が治るか治らないか、ではなく、むしろあなたが再び清くされ、共同体の中で周囲の人々と共に再び生きていくために、あなたはどこで自分の命を見つめ直しますか。あなたはどこで神様と出会いますか……。そのことが問われているのではないのでしょうか。ナアマンにとって、遠いアラムの地から金銀の贈り物を持って、イスラエルまでやって来たことが、大事だったわけではありません。むしろそれらにこだわっていた自分自身を捨てるのが、大事だったのかもしれません。今、私たちにとっての「ヨルダン川」とは、どこにある、何のことでしょうか。コロナで世界中の人々が、病に生活に困窮している一方、格差と差別が拡がり、一部の人々が利権^{むさぼ}を貪り、様々な暴力が各地で噴出しています。そのような現在、神様はどこにおられるのか。どこに神様の力が働いておられるのか。それらを旨に、私たちは今週もまた、神様の命を受けた者として、ここから歩み出して行きます。